

## 膠原病・リウマチ内科

### (スタッフ)

部長：柴富 和貴

### (診療実績)

2016年7月より腎臓・膠原病内科が腎臓内科と膠原病・リウマチ内科に分離していますが、実際の診療は腎臓内科と密接に協力して行っています。

2016年6月以前の柴富の部長一人体制で腎臓・膠原病内科という呼称であった時期は透析部門も医師一人で管理していたためもあり、どちらかという膠原病の入院は腎疾患に比べて少なめでした。その中でも腎炎を合併しやすい顕微鏡的多発血管炎（ANCA関連血管炎）が多かったのですが、腎臓内科との分離後は一部血管炎については腎臓内科入院となるケースも多くなりました。また、2020年4月からの外来化学療法室の拡張に伴い、生物学的製剤の点滴などを入院治療から外来化学療法に移行したため総入院数の減少がみられました。また、COVID-19の流行下で、患者のできるだけ外来で治療したいという希望は強くなってきており、当科の主体は外来診療となってきております。

### (研修・教育)

当科は腎臓内科と共同で研修医のスーパーローテートを担当し、多数の研修医の教育に従事しております。

2020年の初期研修医のローテートは以下のとおりでした。

浦田 侑先生 : 1月、2月、3月  
木下勇揮先生 : 2月、3月  
馬場晶子先生 : 4月、5月、6月  
矢野文子先生 : 4月、5月、6月  
中尾優衣先生 : 7月、8月  
杉本未来先生 : 8月、9月  
蔭山 徹先生 : 9月、10月  
上野愛実先生 : 10月  
卯野明大先生 : 11月  
船木康介先生 : 11月、12月  
柴田稔文先生 : 12月

例年、研修医の先生方に症例報告をしてもらっておりましたが、各種学会の中止、予定が不透明となりその点がままならない年でありました。

### (今後の方向性)

現在、腎臓内科と協力して診療体制を構築していません。膠原病、リウマチの診療は分子標的薬など新しい薬剤の登場で、従来の難病のイメージは次第に払拭されつつあります。

当科でもリウマチ、膠原病の薬剤によるコントロールは全体的によくようになってきており、入院よりも、外来で開業医の先生方、院内他科の先生方からのコンサルテーションを受ける業務の比重が年々高くなってきており、その傾向は年々強くなってきています。

当院の膠原病、リウマチ専門医は柴富一人でありますので、地域の病院との連携を重視しております。大分大学、九州大学病院別府病院をはじめとした大分県内の膠原病リウマチ専門の先生方と協力して、よりよい診療を目指しておりますので皆様方のご協力をお願い申し上げます。

(文責：柴富和貴)

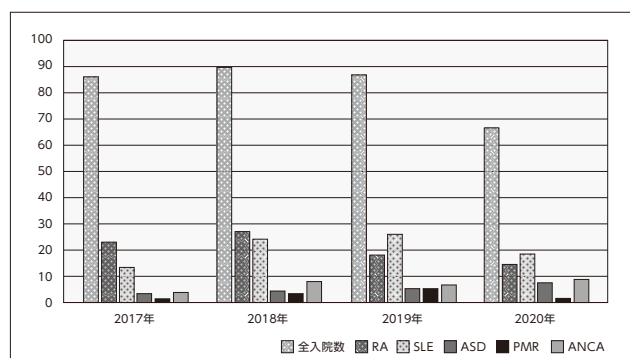


図 入院主病名からみた当科入院疾患の推移  
(腎臓内科と分離後の四年間の動き)

R A : 関節リウマチ  
S L E : 全身性エリテマトーデス  
A S D : 成人スチル病  
P M R : リウマチ性多発筋痛症  
ANCA : ANCA関連血管炎